

とぎめき

情熱の夏から 実りの秋へ

- ◎花火大会 ゴミ清掃に多くの人参加了しました
- ◎地域に活力 夏祭り
- ◎英語スピーチ 2名の北中生が県大会へ
- ◎初任教職員が研修で櫻堂薬師を学びました
- ◎土岐小の環境整備に多くの人参加了しました
- ◎益見区で地蔵祭が開催されました

【探訪と再発見】県天然記念物「土岐双生竹」

【郷土再発見】大久手地区「猫供養塔」



彼岸花（〇がんばな）には多くの呼び名があるようです。一般に知られている呼び名には女郎花（おみなえし）や曼珠沙華（まんじゅしゃげ）があります。彼岸花は球根の分球で群生して行きます。花は咲いても種子ができないため、増殖は球根の分球だけだと言われています。「意外な場所にいきなり彼岸花が生えてきた」のは、土の移動や耕作履歴・水の流れなどにより球根が別場所に移動したことが原因のようです。

花火大会 ゴミ清掃に多くの人に参加しました

令和8年8月8日(土)、第67回瑞浪美濃源氏七夕まつりみずなみ祈願大花火大会が開かれました。打ち上げ予定時刻の天候により開始が15分早まりましたが、午後7時15分から約4000発近くの花火が打ち上がり、多くの観客を魅了しました。

翌9日(日)の早朝6時、商工会議所駐車場に集まった清掃ボランティアの人数は100名を超え、水野市長の挨拶後、グループ分けに従って広範囲の清掃が始まりました。参加者は若者の姿が圧倒的に多く、町を愛する次世代が育っていることを実感しました。



夜空に開く大輪の花火



土岐橋～明徳橋堤防の花火ゴミを拾いました



回収された花火ゴミ

地域に活力 夏祭り

コロナ禍を乗り越え地域の活力が夏祭りの姿で復活してきました。夏は日が長く夜でも安全に催しができ、子どもたちも夏休みで参加しやすいこともあって多くの地域で祭りが開かれています。田植えが終わり、農作業が一段落した夏に豊作を願う行事として発展したとも考えられます。また、暑さによる体調不良や災害・疫病への不安が大きい時期だけに「厄払い」として、神輿(みこし)や山車(だし)で町を清める風習も広まりました。お盆で親戚が集まりやすいことも地域の夏祭りが普及した理由の一つと思われます。祭りはまさに地域の活力の源といえるでしょう。



7/18 益見区



7/25 清水区



7/20 栄町区



8/14・15 一日市場区

英語スピーチ2名の北中生が県大会へ

8月18日(火)、瑞浪市総合文化センターで県内を6地区に分けて開催される「中学生英語スピーチコンテスト」の東濃地区予選(県教委主催)が開かれました。東濃5市の中学校に通う52人が出場しました。

出場者は、歌舞伎や空手などをテーマに自身が努力していることや考えを身ぶり手ぶりを交えながら流ちょうな英語で発表し、優秀賞の8人が県大会出場を決めました。

瑞浪北中からは、小栗柚帆(ゆずほ)さん(3年)大西慶輔(けいすけ)さん(2年)が県大会に出場します。



大西慶輔さん(2年)



小栗柚帆さん(3年)



東濃地区予選優秀賞8名のみなさん

初任教職員が研修で櫻堂薬師を学びました

8月20日（木）、厳しい暑さの中、瑞浪市内の小・中学校に赴任した新任教職員7名が、市内の歴史と文化への理解を深める研修会に参加しました。

市内各所を巡る中で、一行は土岐地区の「櫻堂薬師」を訪問しました。当日は、櫻堂薬師保存会の会員が1000年を超す歴史や文化財、地域に受け継がれる伝統について詳しく解説しました。

参加者は、櫻堂薬師の歴史や逸話に熱心に耳を傾け理解を深めていました。今回の研修で得た知見や瑞浪市の魅力が、今後、子どもたちへの学習指導に生かされることが期待されます。



櫻堂薬師保存会の会員から説明を受ける初任教職員の様子

土岐小の環境整備に多くの人が参加しました

8月22日（土）土岐小学校PTA奉仕作業（土岐地区まちづくり、土岐小学校コミュニティ・スクール協力）が行われました。猛暑が予想されたため、朝7時30分から8時30分に、校舎内の窓拭き、グラウンド倉庫の片付け、グラウンド周囲の草取り、学校周辺の草刈りの各作業に関係者が多数参加し、草刈り女子4名も玄関前の草刈りを受け持ちました。作業に参加した皆さんは夏休み明けの子どもたちが気持ちよく生活できるようにと願って作業し、1時間の活動時間で学校周りが一気にきれいになりました。



多くの参加者によって、みるみるうちに学校環境が美くなりました

益見区で地藏祭が開催されました

8月16日（日）、益見区の中切地藏菩薩（なかぎりじぞうぼさつ）をお祀りする「地藏祭（じぞうまつり）」が行われました。中切地藏菩薩は、江戸時代に旧三河街道（みかわかいどう）を往来する旅人の安全を見守るために造立（ぞうりゅう）されたとされ、地域の「子守り地藏」としても厚く信仰されてきた歴史を持っています。当日は、天眼山大通寺の住職をお迎えして読経が営まれ、参列した住民の皆さんは、家族の健康や地域の安全を願い、静かに手を合わせていました。古き良き伝統と地域の絆が、今も大切に受け継がれています。



中切地藏菩薩は旧三河街道にあり、子守り地藏として地域の信仰が厚いです。

ときそうせいちく 県天然記念物「土岐双生竹」

土岐町に自生する「土岐双生竹（ときそうせいちく）」は、瑞浪市を代表する天然記念物であり、地域の歴史と伝承を今に伝える貴重な自然遺産です。双生竹はイネ科に属する矢竹（やだけ）の変種で、高さ3メートル程に成長します。地下根茎にある二節が非常に近接し、そこから生える茎の太さや節間が揃っている様子が「双子（ふたご）の竹」のように見えることからこの名が付けられたようです。

双生竹は矢の材料に適し、かつては武士の間で珍重されて屋敷の周囲などに植えられたといわれます。当地方では「神篋（こうの）」「一鎌篋竹（ひとかまのだけ）」「篋竹（へらたけ）」などとも呼ばれています。『平家物語』には、仁平3年（1153年）に「鶴（ぬえ）」と呼ばれる妖怪が宮中を悩ませていたところ、源頼政（みなもとのよりまさ）が弓でこれを射て退治したとの説話が記されていますが、伝承ではこの時に用いた矢は、自領の土岐双生竹で作ったものであったとされています。また土岐地区の東部は、明治の初めまで土岐郡神篋村（こうのむら）と呼ばれていました。有名な鶴ヶ城も別名を神篋城（こうのじょう）と呼ばれ双生竹の群生地であったことが窺われます。櫻堂薬師の昔話の月吉・日吉が大蛇を射た矢もこの双生竹で作られたものだったと伝わります。矢竹（やだけ）は本州、四国、九州と広く分布し岐阜県内でも各所に分布しています。双生竹の代表的な自生地としては、新潟県佐渡市の矢島と岐阜県瑞浪市が知られ、市内では土岐町の鶴城・桜堂の2地区でのみ生育が確認されています。かつては鶴ヶ城のあった神篋（こうの）地区に群生していたようですが、近年は生育地が限られ、個体数も大きく減少しています。こうした状況から、昭和31年に岐阜県の天然記念物に指定され、地域の自然遺産として保護が進められています。

桜堂公民館入口には、今も大切に育てられた双生竹の姿を見ることができ、訪れる人々にその珍しい形状と歴史の深さを伝えていきます。

参考資料：瑞浪市役所みずなみ未来部スポーツ文化課、瑞浪市観光協会



県公式ホームページ・文化財・土岐双生竹より



櫻堂薬師西の桜堂公民館玄関先の双生竹

『郷土再発見』

大久手地区

ねこくようとう
猫供養塔



世界に一つしかない供養塔です。大久手の篤農家であった人物が、友人から喘息（ぜんそく）には猫が一番よく効くと教えられ、四日市喘息で悩む人々を救うために、猫の焼き灰にはちみつを混ぜて特効薬を作ったと伝えられています。そのためにたくさんの猫が犠牲となったことから猫たちの霊を慰める意味を込めてこの碑が建てられました。